神戸女学院大学 女性学インスティチュート主催

協力：奈良女子大学 アジア・ジェンダー文化学研究センター

第2回 女性学研究会

日時・場所：2017年9月29日（金）15時40分～・文学館 L-7

◇15:40 ～16:40 栗山圭子先生（神戸女学院大学 文学部 総合文化学科 専任講師）

日本中世における「母」

キャラ弁に手作りのお菓子、PTAの役員やお当番、加えて、おしゃれなワーママたるべく、自身の身だしなみも「魅せる」ことすら意識するなど、現代日本の母は、日々多くのタスクをこなし、その質に対しても高いレベルを求められているのが現状である。一方、日本中世社会では、実母／准母（養母）／乳母のような多様な「母」が存在し、母役割は必ずしも一人の人間に集約されないという現実があった。現代の「積みすぎた」母とは異なる実態について考察するとともに、多様な「母」の存在を生んだ中世社会について検討してみたい。

〈経歴〉 神戸大学文学部卒業、神戸大学大学院文学研究科修士課程修了、神戸大学文化学研究科博士課程修了。博士（文学）。日本学術振興会特別研究員（PD）を経て、2015年度より神戸女学院大学専任講師。神戸女学院大学女性学Inst.所員。専門は日本古代中世史。

◇ 16:50 ～17:50 磯部香先生（奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター特任助教）

早期教育の隆盛は現代中国に何をもたらすか？ －家族・ジェンダー観から読み解く－

現在、東アジア一体は少子高齢（化）社会に突入し、既存の家族・ジェンダー観を再考する時期に来ている。2015年までの約36年間に渡り「一人っ子政策」によって子育ての価値が高まっている中国では、改革開放による市場化の流れの中で、経済的に豊かな階層・世代が、子育てを一回きりの失敗できないライフイベントだと認識し始め、早期教育を行うことを受容し始めている。この早期教育の浸透によって、子育ては父母そして祖父母が一丸となって行うものという既存の子育て観から、両親、特に母親による「科学的知」に基づく新たな子育て・教育観へとシフトしている。そこで本報告では、早期教育が中国の人々にどのように受け入れられているかを明らかにすることで、それが現代中国の家族やジェンダー構造にどのような変容をもたらそうとしているのかを一考してみたい。

〈経歴〉 奈良女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程修了（博士（学術））、國立台灣大學文學院語文中心中國語科留学（台北駐日経済文化代表処（台湾政府教育部）教育部華語文奨学生）、4年間の中国大連外国語大学日本語学院専任外籍教師を経て、2016年5月より奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター特任助教。専門は、東アジア（中国、台湾、日本）の家族関係学、ジェンダー（史）学。

中国遼寧省大連市内の幼稚園での知育教育を見学（2017年）

＊ 研究者対象の研究会です。興味のある方はどなたでもご参加ください。